

卷第四

述壞病

壞病者、誤治之後、陰陽無復綱紀、證候變亂、難_F以正名_{名上}、是也、

壞病とは、誤治の後、陰陽に復_{かえ}る綱紀_{規律}無く、證候變亂、正名_{正しい名}を以て名づけ難き、是也、

巢源、有_二時氣敗候_一、曰、此謂_二病後餘毒未_レ盡、形候變轉、久而不_レ瘥、陰陽無復綱紀、壞病之義、得_レ之益明、蓋壞、崩壞也、猶_二牆壁之壞、不_レ得_レ言_二之牆壁_一、其證候變亂、難_二以正名_一者、不_レ得_レ已姑以_二壞病_一命_レ之、非_レ有_二他意_一、方氏曰、血氣既僂壞、張志聰曰、自敗曰_レ壞、二說爲_レ失、方氏又曰、壞、言_下歷_二遍諸治_一而不_レ愈、此亦不_レ妥、一誤亦爲_二壞病_一、不_二必歷_二遍諸治_一、玩_二三若字_一自知、程氏柯氏所_レ解極是、志聰又曰、已發_レ汗則肌表之邪已去、此語亦有_レ病、發汗違_レ節、亦爲_二壞病_一、且壞病中、有_二表猶在者_一、如_二桂枝加附子、去芍藥之類_一、是也、

巢源^{巢源方「諸病源候論」隨代・卷九時氣病諸候三十六}時氣敗候に有り、曰く*「此謂病後餘毒未盡、形候變轉、久而不瘥、陰陽無復綱紀、^{名爲敗病、}」壞病の義、之を得て益^{益・ますます}明らか、蓋し壞、崩壞也、猶^{ショウヘキ・土塀}牆壁の壞^{くずれ}、之を牆壁と言うを得ざるがごとし、其證候變亂、以て正名^{正しい名}しがたき者、已むもう得ず姑^{しば}らく壞病を以て之を命^{命名}す、他意有るに非ず、方氏曰く、血氣既に僂^{ハイ・疲}壞、張志聰曰く、自敗を壞と曰う、二說失^{あやまち}を爲す、方氏又曰く、壞、諸治を歷^遍して愈えざるを言うと、此亦妥ならず、一誤亦壞病を爲す、必ずしも諸治を歷^遍せず、**三「若」字を玩^{研究}すれば自ら知る、程氏柯氏解する所極^{きわ}めて是、張志聰又曰く、「已發汗」すれば則ち肌表の邪已に去る、此語亦病^{欠点}有り、發汗節^{きまり}を違えば、亦壞病と爲す、且つ壞病中、表^証猶在る者有り、桂枝加附子***、去芍藥の類の如き、是也、

*時氣病後に余邪が残っていて、証候に変化が起こり、長い間治らないと、陰陽がその平衡を失って遂に壞病が形成される。

南京中医学院校釋「諸病源候論」牟田光一郎訳 緑書房

* * 太陽病上十六條「太陽病三日 已發汗 若吐 若下 若温針 仍不解者 此為壞病 桂枝不中_レ与也 觀其脈証 知犯何逆 隨証治之 桂枝本爲解肌 若其人脈浮緊 發熱 汗不出者 不可_レ与也 常須識此 勿令誤也」

* * * 太陽病上二十條「太陽病 發汗 遂漏不止 其人惡風 小便難 四肢微急 難以屈伸者 桂枝加附子湯主之」

太陽病上二十二條「若微寒者 桂枝去芍藥加附子湯主之」

○少陽篇壞病條難_レ解、脈沈緊、金鑑改作_二沈弦_一、然沈字遂不_レ通、尤氏有_レ說、亦欠_二穩貼_一、不_レ録、其掲_二讖語一證_一者、豈唯謂_二邪轉入_レ裏者乎、然從_二巢源_一削_二讖語二字_一、義似稍勝、柴胡證罷、似_レ指_二小柴胡證罷_一、不_二必柴胡諸方不_レ可_レ用也、

○少陽篇壞病條*難解、「脈沈緊」金鑑は沈弦に改作、然れども沈字遂に通せず、尤氏說有り、亦穩貼^{オンチョウ・穩当なこと}を欠く、録さず、其「讖語」一證を掲げるは、豈唯邪が裏に轉入するを謂う者乎、然らば巢源**に従い讖語二字を削る、義稍勝るに似る、「柴胡證罷」小柴胡證罷を指すに似るも、必ずしも柴胡諸方用いべかざるにはあらざる也、

* 少陽病四條「本太陽病不解 轉入少陽者 脇下鞅滿 乾嘔不能食 往來寒熱 尚未吐下 脈沈緊者 與小柴胡湯

若已吐下發汗溫針 識語 柴胡湯證罷 此為壞病 知犯何逆 以法治之」

※ * 巢元方「諸病源候論」第八卷傷寒病諸候三十五壞傷寒候「此謂得病十二日已上、六經俱受病訖おえる、或已發汗吐下而病證不解、邪熱留於府藏、致令病候多變、故曰壞傷寒、本太陽病不解 轉入少陽者 脇下鞭滿 乾嘔不能食 往來寒熱 尚未吐下 脈沈緊 與小柴胡湯 若已吐下發汗 飲柴胡證罷 此為壞病 知犯何逆 以法治之・・・」

或得_レ之誤汗_レ、或得_レ之誤_レ下、或誤吐、或濫鍼、而營衛乖錯、邪熱沈漬、或著_レ上焦_レ、或迫_レ血分_レ、或陽氣虛憊、或陰液竭乏、或水飲相搏、或濕熱內蒸、劇易緩急、種種不_レ同、皆是因_レ素稟強弱、宿疾有無、與_レ誤逆之輕重_レ、而有_レ異已、所_レ謂汗後之汗漏動_レ經、胸滿悸築、下後之結胸痞鞭、協熱下利、吐後之內煩吐_レ食、火逆之驚狂奔豚之類、其證多端、不_レ勝_レ枚舉_レ、今就_レ其情機_レ、爲_レ之區辨_レ、併_レ諸兼證_レ、以述_レ于後_レ、故茲不_レ得_レ詳也、

或いは之を誤汗に得、或いは之を誤下に得、或いは誤吐、或いは濫鍼、而しかして營衛乖カイ・そむき錯みだれる、邪熱沈み漬つかかる、或いは上焦に著つき、或いは血分に迫る、或いは陽氣虛憊ハイ・疲れる、或いは陰液竭ケツ・つきる乏不足、或いは水飲相搏、或いは濕熱內蒸、劇易緩急、種種同じからず、皆是素稟天性強弱、宿疾有無、誤逆の輕重とに因りて、異ことにする有る已のみ、所謂汗後の汗漏れ經を動かし、胸滿悸築うつ、下後の結胸痞鞭、協熱下利、吐後の内煩吐食、火逆の驚狂奔豚の類、其證多端いとぐち、枚舉いちいち数えあげるをあげられず、今其情機情機に就いて、之が區區別辨辨論を爲す、諸兼證を併せ、以て後に述べる、故に茲ここに詳つまびらかに得できない也、

喻氏曰、陽明何以無_レ壞病_レ邪、曰、陽明之誤治最多、其脈證固當_レ辨別_レ、但不_レ得_レ以下_レ壞病_レ名_レ之也、蓋使_レ汗下燒鍼屢誤_レ、其病亦止在_レ胃中_レ、原有_レ定法可_レ施、與_レ壞證無_レ定法_レ之例_レ上、微有_レ不_レ協、錢氏曰、六經之中、仲景獨以_レ陽經之太少_レ爲_レ言者、蓋以_レ在_レ表之誤治居_レ多、在裏之誤治少_レ也、且二經之表裏虛實、疑似多_レ端、難_レ於察識_レ、其誤治獨多、變逆尤甚、其害有_レ下_レ不可_レ勝言_レ者_レ上、故特立_レ此一法_レ、以重_レ其事_レ也、學者其可_レ忽諸、今攷陽明不_レ能_レ無_レ壞病_レ、錢說爲_レ優、三陰亦不_レ言_レ壞病_レ、蓋其最罕_レ有者矣、

喻氏曰く、陽明何を以て壞病無き邪か、曰く、陽明の誤治最も多く、其脈證固きびしく當に辨別すべし、但壞病を以て之に名づけるは得ざる也、蓋し汗下燒鍼屢しばしば誤らしめるも、其病亦止まり胃中に在り、原に定法施すべき有り、壞證に定法無き例と、微やや協一致せざる有り、錢氏曰く、六經の中、仲景獨り陽經の太太陽病上十六條少少陽病四條を以て言いうころは、蓋し表に在る誤治多く居しめるす、裏に在るの誤治少なきを以て也、且つ二經の表裏虛實、疑似まぎらわしい端さぎし多く、察あきらかな識識別は難しい、其誤治獨り多く、變逆尤も甚だしい、其害害勝あげて言うべからざる者有り、故に特に此一法を立て、以て其事を重んじる也、學者其忽ゆるがせにすべき諸か・乎、今攷考するに陽明壞病無き能わず、錢説は優すぐれると爲す、三陰亦壞病を言わざるは、蓋し其最かなめは有ること罕まれなるものなり矣、

○活人書曰、蓋爲_レ病中又感_レ異氣_レ、變爲_レ壞病_レ、此係丙謬乙讀傷寒例、若更感_レ異氣_レ、變爲_レ他病_レ者、當_レ依_レ後壞病證_レ而治_レ之一語甲、趙氏有_レ辨、未_レ覈、

○活人書曰く、蓋し病中又異氣を感じると爲し、變じて壞病を爲す、此傷寒例*「若更更感異氣、變爲他病者、當依後壞病證而治之」の一語を謬ビユウ・誤り讀するに係つながる、趙氏辨有り、未だ覈しらべず、

*傷寒例十二條「・・・若更感異氣 變爲他病者 當依後壞病証而治之・・・」

完 2010/03/01